



校長通信

空の飛び方

「鳥の目」、「虫の目」、「魚の目」

皆さん、明けましておめでとうございます。

年明け最初の通信では、吉野源三郎さんの『君たちはどう生きるか』という小説を紹介します。この小説の漫画版の方は、宮崎駿監督の次回作の題材になることも手伝って、現在、100万部を超える大ヒット作品となっていますが、この小説が刊行されたのはなんと1937年です。この年は盧溝橋事件から日中戦争が勃発した年で、この後、日本は太平洋戦争へと突き進んでいくことになりますが、そんな時期に書かれた本だということをまずは知ってください。筆者は、日本が軍国主義、国粹主義へと向かう中で、青少年の心だけは純真であってほしいという願いを込めて書いたそうですが、80年も前に書かれた小説なのに、古臭くなく、しかも現代の若者たちへのメッセージがあちこちに散りばめられている点に感銘を受けました。



この本では、中学1年生の主人公の日常生活に対して、彼の叔父さんが、直接またはノートによってアドバイスをしていくという形で物語が進んでいきます。小説の中に「ものの見方」についての話が出てきます。その中で、16Cのヨーロッパにおいて、コペルニクスが、教会の天動説を打ち破り、地動説を唱えて、新しい宇宙観を唱えたように、発想を転換してみることが大切であると言っています。この天動説、地動説という考え方は人生を考える上でも、ついて回るもので、子どもの頃は、天動説のごとく自分を中心にしか物事を考えることができなかつたのに対して、大人になると地動説のように、広い世間というものをまず考えるから、いろいろな物事や自分自身を考えることができるようになると言っています。ところが大人の中にも自分を中心にしか物事を考えることができない人たちがいて、そういう人たちは、物事の真相を理解することができずに、自分に都合のよいことだけを見ていこうとします。そのため、彼らは、世の中の本当のことや宇宙の大きな真理を理解することができないでいると、筆者は叔父さんの言葉を借りながら指摘しています。

この「ものの見方」の話から「鳥の目」、「虫の目」、「魚の目」という言葉を思い出しました。「鳥の目」とは鳥が空から下を見下ろすように、高いところから全体を見渡してみる必要があるということです。難しく思えることでも、全体の大まかな成り立ちや仕組みがわかると取り組みやすくなることがあります。「虫の目」とは、虫が地に面した低い位置から回りを見るように、細部にこだわり、足元を見つめなしてみるとことが大切であるということです。そして、「魚の目」とは、魚が見えない川の流れを体全体で感じ取っているように、物事の流れや変化といった「動き」からとらえてみるという視点です。まとめてみると、鳥のように大局を見て、虫のように細部を注視し、魚のように能動的に観察するという視点をもつことで、それまで見えてこなかつたものが見えるようになるということです。

3年次生の皆さんは、目前に迫っているセンター試験に向けて全力を注いでいることと思います。もし、難題にぶつかった時には、いったん心を白紙にして、全体から見渡してみたり、細部にこだわったり、時には、流れにそって自然体で考えてみたりすることで、解答にたどり着くこともできると思います。このことは、人生においても、まったく同様で、一つの方向だけに固執するのではなく、さまざまな角度から物事をとらえていくことで、視界が開けてくることもあると思います。皆さんが、こうした視点をもって今年1年、大きく羽ばたいていってくれることを期待しています。

最後に一言、今年1年、「君たちはどう生きるか」。